

死後の世界 第一部 死とは何か 第1章 人の構造 ⑤

この学び全体のアウトラインと本日の内容

第一部 死とは何か

第1章 人の構造

第2章 死についての聖書的理解

第3章 非物質的部分【靈魂】の不滅

第二部 人は死んだら、どこへ行くのか

第1章 肉体の死後、人の靈魂はどこへ行くのか

第2章 復活までの中間的状态

第三部 死者の復活

第1章 教会の携挙【新約時代の信者の復活】

第2章 大患難期の後の75日間【旧約時代の信者と大患難期の殉教者たちの復活】

第3章 メシアの王国【信者は肉体の死を経ずに全員が変換】

第4章 王国の後【不信者の（第二の）復活、不信者は第二の死へ】

第四部 新しい天と新しい地での永遠の生活

本日は、第一部 第1章 「人の構造」の5回目です。第1回で、人の起原、構造、その継承、物質的部分【からだ】についての7つの用語、そして非物質的部分についてその全体像を説明しました。第2回から、非物質的部分の7つの要素をそれぞれ詳しく見ていきます。第2回から第4回までで、魂、霊、心、肉、思考を扱いました。本日は、意志と良心です。

	日本語	英語	ヘブル語	ギリシア語
1	魂	Soul	ネフェシュ	プシュケイ
2	霊	Spirit	ルアハ	プニューマ
3	心	Heart	レブ	カルディア
7	肉	Flesh	バサル	サルクス
4	思考	Mind	(レブ)	ノウス、フロネーマ
5	意志	Will	ラツオン	テレイマ
6	良心	Conscience	(レブ)	スネイデシス

本日の内容 意志と良心

意志 (いし)

ヘラツォン ギテレイマ

1. 意志の働き

- (1) 人が行動を起こすきっかけになることを、「動機」という。
- (2) 人の心や思考の中には、いろいろな動機が存在する。それらの中から、どの動機を選ぶのか、それが「意志」の働きである。
- (3) 次に、「意志」は、選んだ動機に従って、いつ、どのような行動を起こすのか、判断するという働きもする。
- (4) このとき、人の心や思考の中には、どのような結果になるのか、いくつかの想定が生じている。そして、それぞれの結果につながる、あるいはそれぞれの結果を達成するための手段・方法が考えられている。「意志」は、想定されるいくつかの結果の中から自分が目指す結果を選択し、それを達成するためのいくつかの手段・方法の中から、最適と思われるものを選択する。
- (5) 人は、合法的な手段を選んで合法的な結果を得ようとすることもできるし、また、非合法的な手段を用いて、合法的な結果あるいは非合法的な結果を得ることもできる。

2. 聖書は、不信者の意志と信者の意志とをはっきりと区別している。

(1) 不信者の意志は

- ① 良いことをすることはできる (使 27 : 43)
- ② しかし、意図的に神のみわざを否定する (Ⅱペテ 3 : 5「こう言い張る彼らは、次のことを見落としています」)
 - 「言い張る」ギセロウ 決定する、選択する → 願う、意図する
 - 「見落としている」ギランタノウ 隠されている、気づかない

(2) 信者の意志は、不信者の意志とは決定的に異なる

- ① ロマ 7 : 15～25 この箇所は、信者の意志について語っている。
 - 罪人の霊魂の中には、「肉」または「古い人」と呼ばれる罪の性質が入り込んでいる。
 - 信者になると、「霊」または「新しい人」と呼ばれる新しい性質が入る。
 - 信者は、罪の性質と新しい性質の両方をもっている。
 - 信者の内側では、何かを選択しようとする、罪の性質に従って選択するか、新しい性質に従って選択するか、葛藤、衝突が起きる。
 - このときに、どちらを選択するのかは、意志の働きによる。
- ② I コリ 7 : 36～39 この箇所は、信者の意志が、いろいろな選択肢の中から選択することができることを示す。
 - 「神の完全なみこころは、常に、唯ひとつである」と教えるのは、誤り。

- 信者は、想定される複数の選択肢が自分の前にあるとしたら、まず、その中から、明らかに聖書に反する、すなわち神のことばが教えるところに反した方向に向かわせるような選択肢を除く。残った選択肢の中から、信者は新しくされた思考によって考え、選択すればよい。どれを選んだとしても、神はそれをよしとされる。
- ③ ピリピ 2:13「神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行わせてくださるのです」 この箇所は、信者の意志を通して、神の意志、神のみこころが働いてくださることを教えている
 - 信者が新しくされた思考によって考え、選択するときには、信者は神のみことばを用いる。よって、信者の意志は、神のみことばを通して神のみこころに導かれる。
 - ギリシア語聖書の原文を語順に沿って直訳すると、「神は、あなたがたのうちに働いてくださるお方である。(その働きは) 次の両方であって、何かを選択すること と それを実行すること。その目的は、良き楽しみ ギョウドキア【満足、喜び → 願い】」
- ④ テトス 3:8「神を信じている人々が、良いわざに励むように心がける ギフロンティゾウ【思考を用いる、注意する】ようになるためです」 この箇所は、信者の意志が、正しいことを行う方向に向かうことができることを教えている。
 - 信者の意志は、正しいことだけでなく、誤ったことを行うように選択することもできる (1 テモ 6:9「金持ちになりたがる ギボウロマイ【意図する、決心する】、ヤコブ 4:4「世の友になりたいと思ったら ギボウロマイ」
 - 誤ったことをしたときに、「悪魔が私にそれをさせた」と言ってはならない。信者が行ったことは、信者自身の意志をもって選択し、行ったことである。そして、信者は、自分が選択し、自分が行ったことについて、責任を負う (ガラ 6:7)。
 - 悪魔は信者の前に誘惑を置くことはするかもしれない。しかし、その誘惑に従うかどうかは、信者の意志の問題である。信者は、悪魔に抵抗しようと思えばできる、そうすれば誘惑から逃れることができたはずである (ヤコブ 4:7「悪魔に立ち向かいなさい ギアンティステミ【対向して立つ、抵抗する、反対する、耐える】。そうすれば、悪魔はあなたがたから逃げ去ります」)。にもかかわらず、それをせずに誘惑に陥ったのは、信者が自分の意志で選び取ったのである。

良心 (りょうしん)

(レブ) ギスネイデシス

1. 聖書での用例

- (1) 旧約聖書：ヘブル語ではレブ（心）を用いる。Ⅱサム 24：10「良心のとがめ」、ヨブ 27：6「私の良心は生涯私を責めはしない」
- (2) 新約聖書：ギリシア語では、カルディア（心）とは区別して、「良心」をスネイデシスという。全部で 32 回。

2. 良心の働き

- (1) 良心は、人に対して、ある道または別の道を行くようにと指示を発する。良心がこのような指示を発することができるためには、その人が「ある道」または「別の道」について、知識を持っている必要がある。よって、良心と知識は切り離すことはできない。
- (2) 良心は、道德規準との関係で働く。人が道德規準に反することをすると、良心が働き、人は良心のとがめを感じる。
- (3) 良心が働くためには、道德規準に関する知識をもっていることが前提となる。それも単なる認識ではなく、自分と結び付けて、自分は何をしてよいか、してはいけないか、ということを知っていなければならない。
- (4) 良心は、その人が何か行為をしたときに、その行為が規準に適合するか、そうでないか、を明らかにする。よって、どのような行為をしたら規準に反するのか、行為についての具体的な知識も必要である。
- (5) 良心は、規準に従って判断を下す。よって、もし規準が間違っていたら、良心は誤った判断を下すことになる。規準が正しければ、良心も正しく機能する。真の規準たりえるものは唯一、神のことばである。

3. 良心と人の墮落

人の墮落によって、罪の性質＝肉が入り込んだ。良心は、肉によって影響を受けている。どこかが壊れている良心である（ヘブル 10：22「邪悪な良心」）。

4. 良心の9つのタイプ

- (1) 邪悪な良心（ヘブル 10：22）
- (2) 正しい良心（使 23：1「全くきよい^ギアガソス良心（正しい良心のすべて）」、Ⅰテモ 1：5、1：19、ヘブル 13：18、Ⅰペテ 3：16～21）
- (3) 弱い良心（Ⅰコリ 8：7～12）
- (4) 明示されていないが、(3) に対して、強い良心（Ⅰコリ 8：7～12、10：25～29）
- (5) 汚された良心（Ⅰコリ 8：7、テトス 1：15）
- (6) 傷つけられた良心（Ⅰコリ 8：12） 「彼らの弱い良心を踏みにじる^ギトゥプトゥ【手や棒で相手をたたく→打つ、たたく、傷つける】」
- (7) 麻痺した良心（Ⅰテモ 4：2）・・・こうなると良心としては全く機能しない
- (8) きよい良心（Ⅱテモ 1：3）・・・^ギカサロス きれいな ^英clean
- (9) 責められることのない良心（使 24：16）

このように9つものタイプを持つので、良心は決して完全なガイドではない。それは、人の墮落によって影響を受けていて、どこか壊れているものである。しかし、正しい規準に立って働くなら、良心は頼りになるガイドとなる。正しい規準とは、神のことばである。

5. 良心とディスペンセーション（神の計画の進展における時代区分）との関係

- (1) 律法のディスペンセーションにおいては、旧約の聖徒たちは、動物の犠牲をささげることによって罪が許され、神との関係を回復することができた。しかし、その罪はおおわれるだけであって、罪が完全に処理されるにはメシアによる贖いを待たねばならない。そのため、旧約の聖徒たちの良心がきよめられることはなかった（ヘブル9:9、10:1~2）
- (2) そのために、旧約の聖徒たちはメシアの贖いによってはじめて完全にされた。ヘブル12:23の「全うされた義人たち」とは、旧約の聖徒たちを指す。
- (3) これに対して、恵みのディスペンセーションにおいては、新約の聖徒たちは、信者になったその時点で良心もきよめられ、罪を意識することはなくなる（ヘブル9:14、10:22）。新約の聖徒たちは、信者となったその時点ですでに、メシアにあって「完全な者」である。（コロ2:10「キリストにあって、満ち満ちている」**ギ**プレロウ【完成している、完全である】）
 - 信者は、実際面では、自分の生き方に多くの欠けたことがあろうとも、メシアにあって「完全な者」という地位を受けている。その地位にあるがゆえに、信者は完全である。
 - 信者の実際面を、その地位にふさわしくすることが成長であり、聖化である・・・エペソ4:13「完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身だけにまで達するのです」

6. 良心の役割

- (1) 良心の主要な役割は、神の律法や神のことばを真の規準であるとあかしすることである（ロマ2:15、9:1）
- (2) 聖書は、良心が役割を果たすべき事柄を7つ記している。
 - ① 政府に従うこと（ロマ13:1~5）
 - ② 横暴な主人のためにも良い仕事をする（Iペテ2:18~19）
 - ③ 自分の行動が、神から来る誠実さに基づいているか、人間的な知恵によらず神の恵みによって行動しているか、吟味する（IIコリ1:12）
 - ④ 適切な行動は、他の人の良心からの同意を受けることができる（IIコリ4:2「神の御前で自分自身をすべて人の良心に推薦しています」）
 - ⑤ 自分が言っていることが真実であることを証言する（ロマ9:1）
 - ⑥ 他の信者との人間関係におけるガイドになる（Iコリ8:7~12）
 - ⑦ 信者が試練に耐えるための基盤となる（Iペテ2:19）
- (3) これらの役割を果たすとき、その良心は「正しい良心」である。